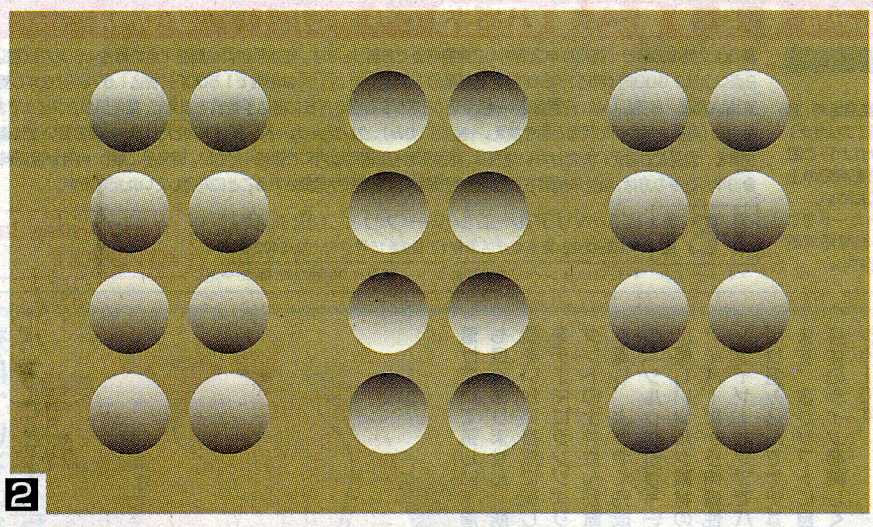


2

クレーター錯視（ラマチャンドラン図形）

目の冒険

錯視の話⑨

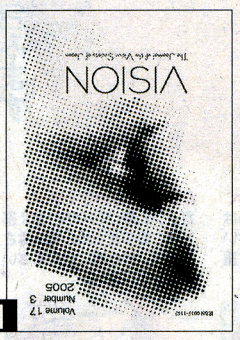
北岡 明佳

人間を含む地球上の生物のほとんどは、左右対称か放射状の形態をしている。上下まで対称であるものはまれである。

視覚（ものを見る働き）も上下対称ではない。1は、ある学会が発行するジャーナルの表紙である。ぱっと見ると、ジャーナル名は「ノイジア（NOISIA）」で、よくわからない点の集まり、あるいは変な顔が描かれているように見える。しかし、よく見るとこの図はさかさまで、描かれているのはやさしい目のお姉さんで、日本視覚学会発行の「ヴィジョン（VISION）」であることがわかる。

このように、顔の知覚や文字の認識には上下の方向性が強くあって、さかさまのイメージから正立像を推定するのは容易ではない。

ノイジア？



1

上下と凸の認識が優位

錯視の世界では、クレーター錯視というものが知られている。へこんでいるはずのクレーターの写真をさかさまにして眺めると、出っ張っているように見えるという錯視である。よく研究に用いられるのはラマチャンドランのグラデーション円の図形である。2では左右のそれぞれ2列は半円球が出っ張っているように見え、中の2列は引っ込んでいるように見える。ところが、図をさかさまにすると、前者は凹に、後者は凸に見える。

ということになっているのだが、実は、すべて凸に見える人も少なくない。縁日などで売られているお面を裏から見ると、ひっこんでいるはずなのに出っ張って見えたりすることがあるが（ホロウマスク錯視）、これも凸優位現象である。視覚は凹凸も対称ではないのである。

（立命館大助教授）